

連合艦隊 の最後

伊藤正徳

文藝春秋新社

伊藤正徳

連合艦隊の最後

文藝春秋新社

連合艦隊の最後

伊藤

著者略歴

明治22年茨城縣に生れ、大正2年慶大理材料卒業後、時事新報社に入社。昭和3年編集局長、その後、共同通信社・日本新聞協會、各理事長、時事新報社長、産経時事主幹を経て産経新聞顧問として活躍中、昭和37年4月21日逝去。享年72。

世界屈指の軍事問題通として知られ「恒子の思ひ出」「外交讀本」など多数の著書がある。

昭和三十一年三月三十一日 第一刷
昭和四十年七月十日 第二十九刷
三九〇円

著者 伊藤 藤正徳

發行者 上林 吾郎

發行所

文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

序

一

二百五十餘隻、百六萬トンの連合艦隊が出撃し、戦終るや、戦艦〇、重巡〇、小型空母一、輕巡三、潜母一、特務二、驅逐艦三〇、潜水艦一二、合計四十九隻しか残つていなかったという惨敗を、開戦の前後に何人が豫想したのであろうか。

大本營は、勝つた戦は誇大に發表したが、敗戦は悉く秘匿した。國民の意氣を沮喪させないため、という理由からであつた。米英が、敗戦を常にそのまま發表して國民の奮起を促していたのに較べると、思慮の深淺に格段の相違があつた。かくて我が國民は、斯くまでの惨敗とは知らずに終戦を迎えた。だから多くの人は「レイテ海戦？ それは何だ？」といった具合だ。「マリアナ沖の決戦？ そんな海戦があつたのか？」と苦笑する。「七萬トンの空母信濃が出陣の第一日に沈められた？ そんな大きい軍艦が？」と怪しむだけである。

敗戦十年を経た八月十五日の記念に、私は試みに、本書の題名で數回の海戦記を書いてみた。ところが、市井の反響は、私の四十年の記者経験中で最大のものを感じ、記者として退き下がるのが出來な

くなつた。遂に、「時事新報」紙上に七十六回、引續き「産經時事」の紙上に四十一回の長篇を書いてしまつた。書き續ける以上は、正確な史實に基き、綜合的に、解説と批判とを織り交ぜて、一つの描寫を試みようと思ひ立つた。謂わば連合艦隊の傳記の終末篇を書くようなものだ。

二

連合艦隊はお葬式を出していない。一個人の死が新聞の記事になり、本願寺や青山齋場の行列を見ることを思えば、四百十隻が沈み、二萬六千機が墜ち、四十萬九千人が斃れた「連合艦隊の死」を、お葬式なしに忘れ去るというのは、餘りにも健忘であり且つ不公平でもあらう。私は海軍のフレンドとして、その國防史の一つのブランクを埋める役目を買つて出たようなものだ。私が海軍擔當の記者として勉強したのは、大正三年から六年までの三カ年に過ぎないが、その因縁の絲が四十年近くも切れなかつたのは、一つの運命なのであらう。

連合艦隊の最後は、哀れという文字の代表であつた。その敗北は、慘澹という表現の極致であつた。敗れずに濟んだものを、天運に見放されて敗れた戦さもある。一時の油斷のために、勝つべきを失つて戦争敗北の遠因を作つた戦さもある。「惜しい」という言葉の意味を、本當に噛みしめる場合は幾つもある。

が「惜しい」最大のものは、世界第三位の海軍力を全損したことだ。世界第一の軍艦を失つたことだ。世界第一の兵器が無駄になつたことだ。世界で一、二を争つた兵術が、生産力の不足によつて立往生に終つたことだ。そうして、それらは、政治を誤らなかつたならば、軍閥が日本を支配しなかつたならば、

また海軍に開戦反對の勇氣があつたならば、「失わずに濟んだ」ことを顧みて「惜しい」想いは、愈々痛切ならざるを得ない。況んや領土を失わずに濟み、世界一流の大國として存在し得たことを考えれば、「惜しさ百倍」の念佛を高唱する外はない。

三

しかしながら、この小さい島國が、開國五十年にして世界五大國の一つに位した驚異の躍進と併行し、海軍力の躍進が一層の華々しさを誇つた歴史は消えるものではない。大正の末期、我が海軍は既に世界三大海軍の一つに列なり、昭和十六年の實力は、イギリスと第二位を爭う程度に充實していた。それほどの立派な連合艦隊は、悉く日本國民が造り上げたものであつた。我が民族の財力と智力とが生んだ以外の何物でもなかつた。

またそれを驅使して戦つた將兵は——特に百萬の若人は——日本という國の爲に、身を挺して國難に赴いた。戰爭を決めた少數の犯人は萬死に値するが、戦つた幾百萬人の犠牲心は、時代が何う變ろうとも、不滅の尊い記録として永えに民族史の上に染めらるべきである。

連合艦隊とその人々。艦隊は再び還らないが、日本と日本人とは残つた。問題は、その日本人が、「還らぬ人々」の愛國心と犠牲心とを記憶して、よく己れの戒めとするか何うかに懸かる。連合艦隊を還元するとすれば概算二兆五千億を要するから、それは還らぬものと諦める外はあるまい。だが、日本人の心は還元し得るであらうし、また還つて貰わなければならない。いな、屹度遠からずして還るであらう。

私は太平洋海戦史を書いている間に、民族の正しい認識、犠牲心の尊さ、日本の希望、國民の矜持、といった感想の湧いて来るのを禁じ得なかつた。右はそうした感想の一端を述べたもので、本書を読まれる人々の感じは各々異なるであらうし、また、それこそ完全に自由だ。本書は唯だ、海戦を出来るだけ正確に調べて、一記者としての批判を書いたものに過ぎない。連合艦隊の最後を弔つたまでである。回顧する、昨年の一月には亡妻を弔うために「恒子の思ひ出」を書いた。いま又、艦隊を弔う一冊を書いた。次は、何か大いに興るものを書き度いものである――。

昭和三十一年一月

伊 藤 正 徳

増刊私語（二十五版發刊によせて）

- 第二十五版が出版される事になつた。
- 二十五と言う數字は、自分の一番好きな數字だ。多分其の年大學を出て、一人前になつたからであらう。
- 丁度この時、米英佛三國から譯本が出版される事になつた。
- これをもつとも喜ぶであらう妻の墓へ代参をおくつた。
- これが丁度、百二十五回の墓参になつた。

昭和三十七年四月

著 者

目 次

序……………一

第一章 艦隊成るまで

- | | | |
|---|------------------|----|
| 1 | 連合艦隊への郷愁…………… | 二三 |
| 2 | 「不沈戦艦」の秘密建造…………… | 二六 |
| 3 | 建艦すれども戦争せぬ…………… | 三〇 |
| 4 | 對米戦争の勝算?…………… | 三三 |
| 5 | 世界に誇つた大造艦技術…………… | 三六 |
| 6 | その名高し、無敵艦隊…………… | 三九 |
| 7 | 精銳、潜水艦隊歸らず…………… | 三三 |
| 8 | 超大空母「信濃」の悲劇…………… | 三五 |

第二章 眞珠灣の回想

- | | | |
|---|---------------|----|
| 1 | 世界的の大奇襲…………… | 四一 |
| 2 | 大奇襲着想の由來…………… | 四二 |
| 3 | 見事なる攻撃…………… | 四九 |
| 4 | 特殊潜航艇の参戦…………… | 五三 |
| 5 | 戦略的に失つた説…………… | 五四 |

第三章 順風満帆の緒戦

- | | | |
|---|----------------|----|
| 1 | マレー沖海戦に至る…………… | 五九 |
| 2 | 海空軍の驚異的战果…………… | 六三 |
| 3 | スラバヤ以下の海戦…………… | 六七 |
| 4 | 珊瑚海の戦術勝…………… | 七一 |

第四章 ミッドウェー海戦

1	太平洋戦争の敗因第一號……………	五
2	長期戦の自信なし……………	七
3	連合艦隊の全力出撃……………	六〇

4	暗號は讀まれていた……………	三
5	將帥に心の驕りあり……………	六五

第五章 ソロモン消耗戦

1	ガダルカナル奇襲上陸……………	五
2	連日海戦、實に百餘回……………	七
3	太平洋の旅順口……………	一〇一
4	一勝一敗一引分け……………	一〇四
5	「圓タク駆逐艦」で救援……………	一〇六

6	潜水艦も運送に専心……………	一〇九
7	驚くべき航空消耗戦……………	一二
8	攻勢終末點の超越……………	一五
9	艦隊決戦のない戦争……………	一八
10	東京進攻の二つの道……………	二二

第六章 マリアナ海戦

1	第一機動艦隊への期待……………	一五
2	決戦用の基地空軍……………	一八
3	決戦場の豫想を誤る……………	二三
4	敵の物量を討つ……………	二四

5	祝盆用意の出撃！……………	二七
6	密雲日本を閉す……………	二九
7	新式旗艦「大鳳」沈む……………	三三
8	敗戦の跡を顧みて……………	三七

第七章 レイテ海戦

1	所謂「艦隊の殴り込み」……………	一五
2	落ちて行く「平家」の如く……………	一五
3	戦意は「源氏」の如く……………	一五
4	リンガ泊地の猛訓練……………	一五
5	眞ッ裸の艦隊……………	一六
6	作戦の不满、全軍を掩う……………	一六
7	長官、艦隊の不满論……………	一七
8	大艦隊の威容あり……………	一七
9	主力艦を狙い襲う……………	一七
10	戦艦「武蔵」の最後……………	一七
11	栗田長官の進撃断念……………	一八
12	再轉進撃を決行……………	一八
13	西村中將死地に赴く……………	一八
14	レイテ灣頭に消ゆ……………	一八
15	繼子の艦隊出現……………	一九
16	惨敗を目的とした艦隊……………	一九
17	武者振いする「いけにえ」……………	二〇
18	敵は四へ襲いかかった……………	二〇
19	水平線上敵艦見ゆ……………	二〇
20	サマール沖の一戦……………	二一
21	史上ナゾの大事件……………	二一
22	カラ船と心中は御免……………	二二
23	機動部隊を血祭に……………	二二
24	敵機動部隊を捜し廻る……………	二三
25	九死一生を限度とす……………	二三
26	栗田長官自身に聞く……………	二三
27	満身創痍、基地に歸る……………	二四
28	サマール沖海戦の批判……………	二四
29	米提督は今なお争う……………	二四
30	レイテ戦完敗の跡……………	二五
31	神風特攻隊に合わず……………	二五

第八章 二つの特攻作戦

1	菊水作戦の決行……………	二五九
2	決死出撃の前夜……………	二六三
3	第二艦隊僅か十隻……………	二六四
4	「大和」遂に沈む……………	二六五
5	特攻の犠牲二、一九八名……………	二六六
6	昭和二十年は特攻の年……………	二七五
7	世界無類の日本の魚雷……………	二七四
8	人間魚雷「回天」の出撃……………	二七七
9	原爆搭載艦を屠る……………	二八〇

第九章 結論（その一）

1	連合艦隊、陸に上る……………	二八五
2	旗艦陣頭主義の是非……………	二八六
3	戦場近く指揮を執れ……………	二八七
4	米の長官は陸に住む……………	二八八
5	世界一流の海軍興る……………	二九六
6	十萬トンの大戦艦……………	二九七
7	大海軍遂に亡ぶ……………	三〇三
8	一將功不成、萬骨枯る……………	三〇五

第十章 結論（その二）

1	残った軍艦と其の運命……………	三〇九
2	如何に敵を沈めたか……………	三二一
3	開戦と海軍の立場……………	三二六
4	海軍の明言回避の事情……………	三二九
5	陛下も海軍に頼らる……………	三三三
6	斯くて自ら亡ぶ……………	三三七

連合艦隊の最後

第一章 艦隊成るまで

一 連合艦隊への郷愁

立派だつた艦と人とを弔う

「連合艦隊」の名は長く國民に親しまれていた。「聯合艦隊」の字は海國日本の護りとして、安全感の護符のように思われていた。世界第三位の海軍。或る艦種では世界一の海軍。強く、しかもスマートな姿。威容という文字がそのまま當て嵌まつた海軍。それは國民に親しまれ、且つ信頼される十分の眞價を持つていた。

その大海軍が、いかに敗れたとはいえ、影も形も残さないように消え去つたのは一體何うしたわけだろう。昭和十六年十二月八日、廣島灣を打つて出た大戦艦十隻の中の九隻が沈没し、僅かに残る一隻の「長門」が、横須賀埠頭に繋がれて砲術學校の教室に使われていたという——敗戦直後ビキニに曳かれて原爆の試験に沈む——一〇〇%の凋落は、そもそも如何にして由來したか。

敗戦の翌春、文藝春秋は早くもこれを捉えた。連合艦隊の末路について、私に執筆を希望した。私は

確信もなかつたし、また、友人の屍を掻き廻すような氣がして心が進まなかつた。また、假りに無理をして書いたとしても、今日のような記録は得られなかつたに相違ない。今は敗戦から十カ年を過ぎて、一般の氣持も漸く落ちつくと同時に、不思議にも（？）、未だ「連合艦隊」に對する回顧の情が、國民の心に生きてゐることを發見した。四、五回で打切る豫定で、時事新報に書いた表題の拙文が、相次ぐ要求によつて遂に八十回の長稿に發展して了つたのは、私の意思であるよりは一に讀者の意思であつた。

思うに「連合艦隊」の名は、残念にも「聯」の字が「連」に變つてしまつたが、それに對する憧憬の回顧は、國民の胸底深く秘められていたようである。曾て東郷司令長官がロシアのバルチック艦隊と決戦するため出動するに際し（日本海海戦。世界名は對馬海戦）、鎮海湾の淀泊地から大本營に宛てた電報に、
「敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直ちに出動これを撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども浪高し」

の一文は、その後久しく國民が愛誦した名文句であつた。それはまた、戰闘開始に當り、旗艦三笠の檣頭高く掲げられた、

「皇國の興廢この一戰にあり。各員一層奮勵努力せよ」

の信號——いわゆる「Z信號」——と共に忘れられない感激の文字でもあつた。遡つて黄海海戦（日清戰爭の海上決戦）には旗艦松島の勇敢なる水兵があつた。敵艦定遠（當時の世界的巨艦で我が主力艦の二倍大）の巨弾が「松島」に命中して多數の死傷者を出した。その中の瀕死の一水兵が、通りかかつた副長に縋りついて呼吸も苦しく尋ねたのは「定遠はまだ沈みませんか」という一語であつた。副長は感激し「安心せよ。定遠は戰闘不能に陥つた」と告げるや、水兵（三浦寅次郎）は最後の微笑を湛えながら「どうか